(1)　「２号墳」とＢ地区の中間に位置する経塚

(2)　Ｂ地区２区の完掘状況

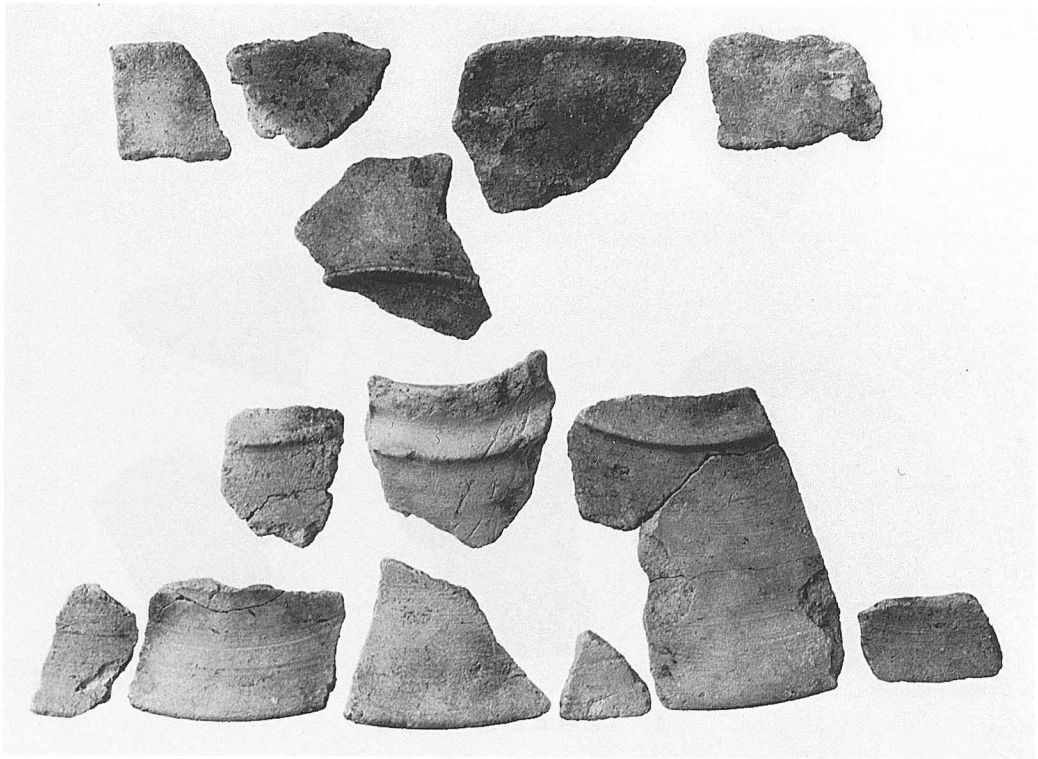
(3)　Ｂ地区１区の南北土層断面

(4)　Ｂ地区１区角礫検出状況（南から）

(1)　B 地区角礫除去後の焼土層の検出状況

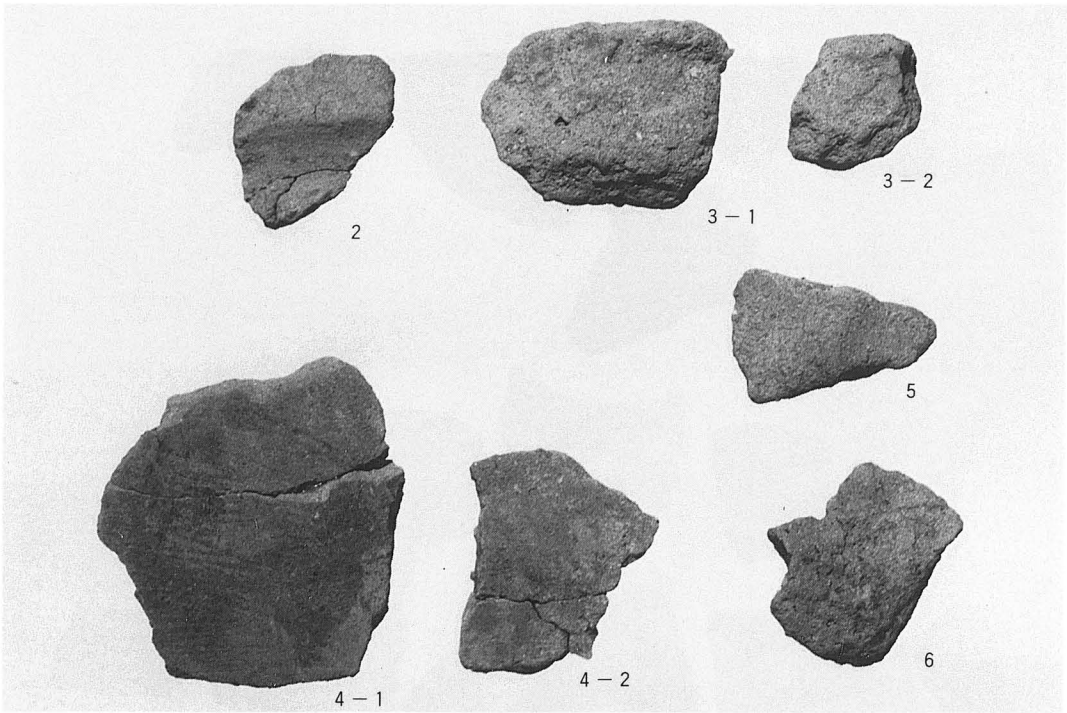
(2)　B 地区角礫除去後の焼土層断面

(3)　B 地区 3 区の土壙（南から）



(1)　1号墳出土土器鼓形器台

(2)　同上　鼓形器台脚部の拡大

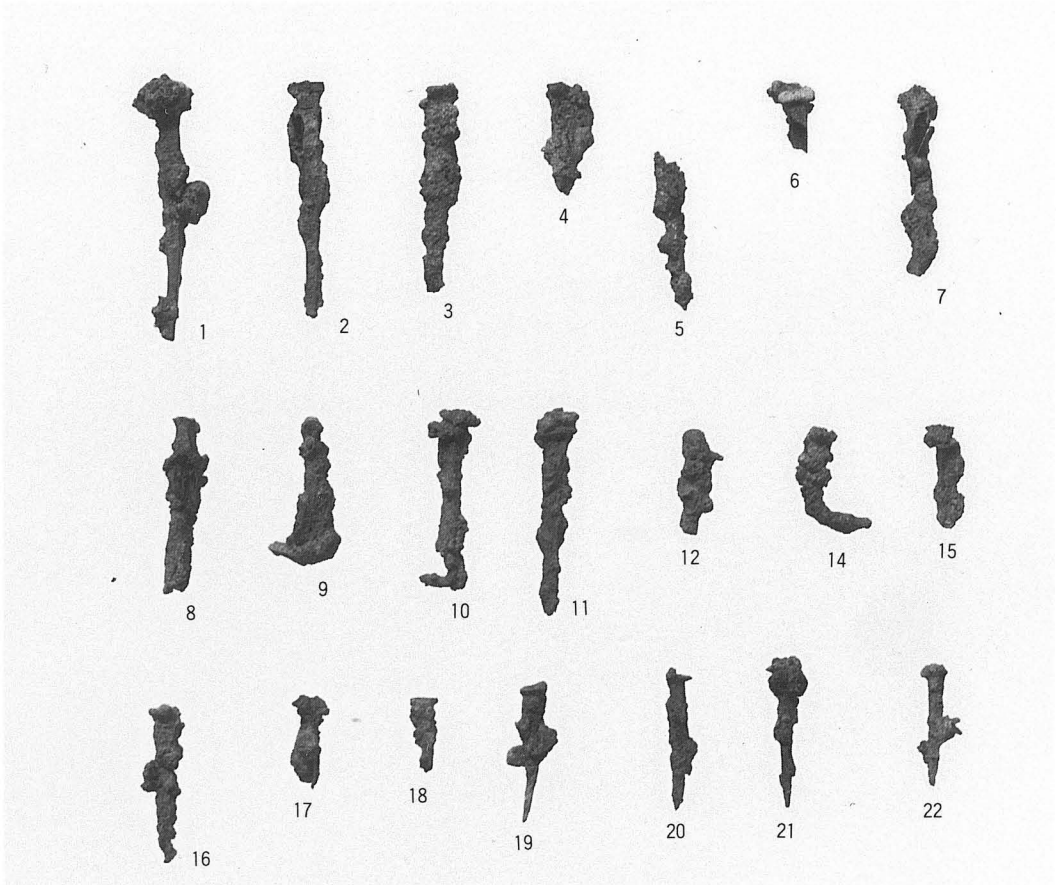


(1)　1号墳出土土器　甕ほか

(2)　同上　甕胴部片拡大

(3)　同上　穿孔のある壷？片拡大（内面）

(1)　1号墳出土砥石



(2)　B地区1区出土鉄釘

第Ⅲ部　波佐（はざ）・長田地区の歴史を探る

1．波佐・長田地区の遺跡案内

那賀郡金城町の南にある波佐地区、長田地区は長い歴史をもっています。万をもって数えられる時間の流れの中で、人々がこの地を切り開いてきた確かな歩を、現在のわたしたちに直接語りかけるのが遺跡です。波佐・長田地区には多くの遺跡があります。その中での代表的な遺跡として知られているのは七渡瀬Ⅰ遺跡、七渡瀬Ⅱ遺跡、長田郷遺跡、波佐一本松城跡などです。

七渡瀬Ⅰ遺跡は、現在の「和紙の館」の建っている所にありました。「館」が建設された時に土器がたくさん出土して遺跡とわかりました。この遺跡から発見されたのは、縄文時代末期から中・近世にかけての土器、石器、陶磁器でした。

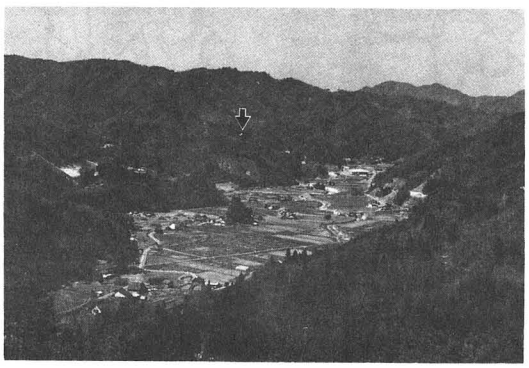
「ときわ会館」の建設の際に調査された七渡瀬Ⅱ遺跡は、七渡瀬Ⅰ遺跡と地続きで本来は一つの遺跡として取り扱うのが適切と思われます。おそらく、Ⅱ遺跡で捨てられた土器や石器が、長田川の洪水その他でⅠ遺跡に流されたり、移動したのではないかと考えられます。

七渡瀬Ⅱ遺跡の重要性は、古墳時代初期（いまから約1600年前）の「むら」跡が見つかったことや多数のよそから持ち込まれた土器などが掘り出されたことです。古くから波佐・長田地区の中心街がここにあったことを推定させています。

このⅡ遺跡の「むら」とほぼ同じ頃に造られた古墳が千年比丘の丘陵の先端で発見されました。千年比丘の丘陵上には、この他にも経塚（お経を納めた塚）や中・近世の墓もあるようです。波佐・長田地区の聖地の一つという感じがします。

千年比丘丘陵の下の水田には長田郷遺跡があります。七渡瀬遺跡群のあるところから南に約500メートル長田川をさかのぼったところです。この遺跡は、弥生時代後期（いまから約1800年前）の土器を中心に縄文時代後・晩期（いまから約3000年～2400年前）の土器、奈良～平安時代の須恵器、土錘（網のおもり）や石鏃（やじり）、石斧（石おの）などの石器類が出土しています。また中世頃の青磁（中国から輸入された緑色の上等の焼き物）や兵庫県南部の陶器窯で焼かれた土器（ねずみ色をした硬い焼き物の鉢）も出土しています。他には、ドングリなどの自然遺物も採集されました。

奈良時代の遺跡としては、発掘調査で明らかになった七渡瀬Ⅱ遺跡の竪穴住居跡があります。この時代の土器もかなり掘り出されました。この他にも、例えば、長田地区の城ノ前遺跡などは奈良・平安時代に「むら」があった可能性がありますし、波佐地区にも同じ頃の集落があったことが考



波佐・長田地区の全景
（1．七渡瀬遺跡群、2．一本松城跡）

えられます。今後の調査が期待されます。

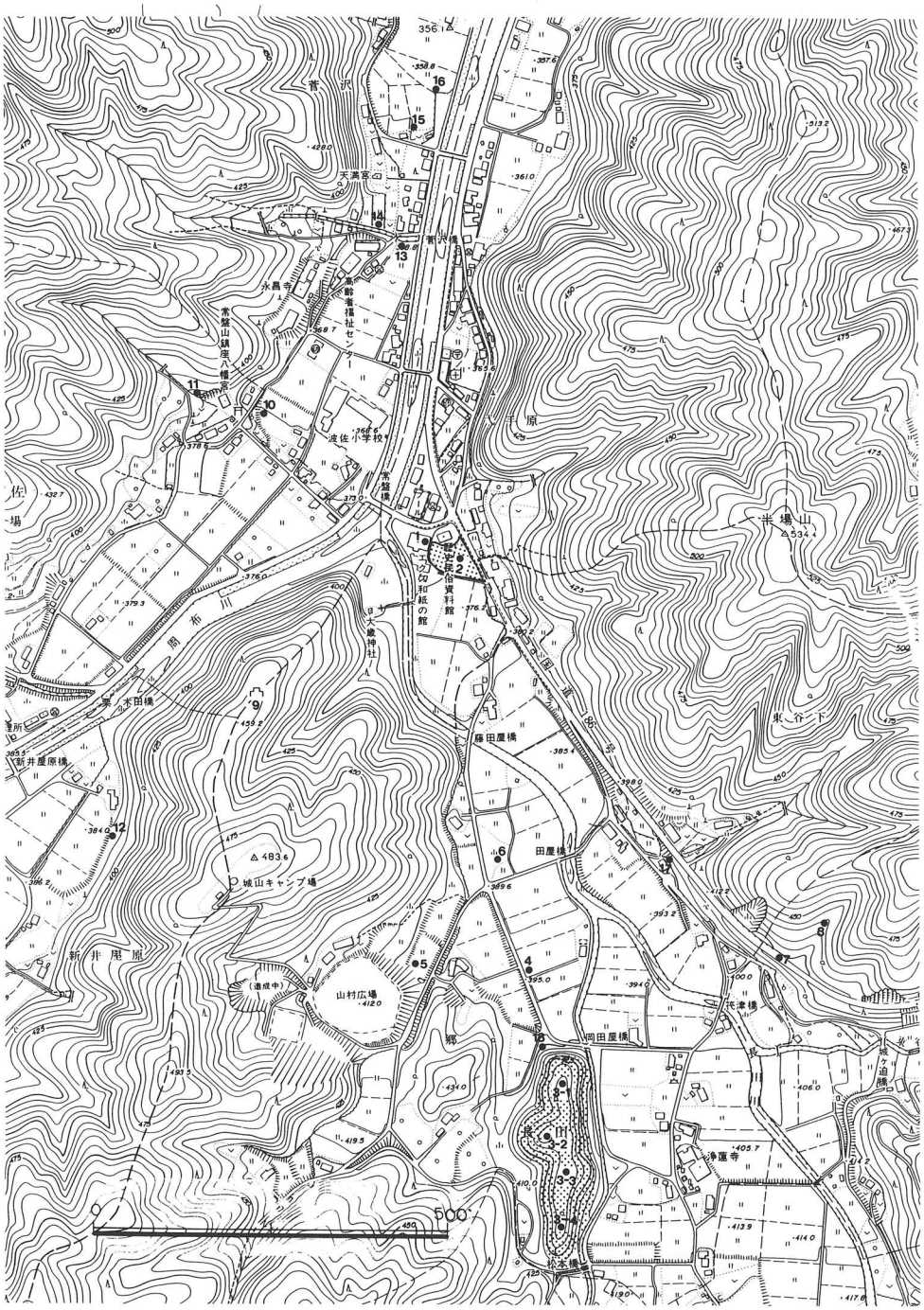
中・近世には、波佐一本松城（町指定）が中世城郭として有名です。この山城跡には畝状空堀や曲輪がきちんと残っており、大井川から水を引いた水路もあります。規模や構えの特徴は全国的にも注目されています。先に紹介した城ノ前遺跡からは中世の土器や中国産の青磁が採集されていますので、ここには城の主に関係する屋敷があったのかも知れません。他に、1336年に波佐谷の合戦があり、その時の戦死者を葬ったとされる千人塚、剣の墓などの古墓があります。さらには中世城跡では一本松城とのつながりがある防御施設として、水見の城跡や花城（波佐地区）、長田城跡（長田地区）があります。

波佐地区の常磐山八幡宮は戦国時代頃に建立されたもので、その施設跡として千代帽子遺跡、常磐山の的場があります。このお宮は、当時は広い境内をもっていたと思われます。

近世の遺跡としては波佐代官所跡、菅沢の庄屋跡があり、鉄滓（かなくそ）が落ちていることで判明する製鉄関連の遺跡があります。金城町は、古代～近世・近代まで鉄づくりがさかんに行なわれていたようで、このことに関連する遺跡がたいへん多いようです(図中－8正古庵鉄穴跡、17堂ケ原炉跡など）。西中国山地一帯でも製鉄跡のタタラや大鍛冶場、小鍛冶場の遺跡はひじょうに多く、良質な砂鉄、豊富な森林と水資源などの物理的、地理的条件に恵まれて鉄づくりと鉄の道具の生産が活発でした。金城町もこの鉄産地の一角を占めていた訳です。なお町内では製鉄生産が近代まで継続して行なわれています。

ところで、最近は明治時代の産業の跡も遺跡として扱われるようになりました。千年比丘には林の中に瓦を焼いた窯の跡が残っています。これらは波佐・長田地区の歴史の生証人として大切にしていかなければならないように思います。　　（久保谷浩二）

七渡瀬ムラの住居内の様子



波佐・長田地区の遺跡の分布（上方が北、下方が南）

波佐地区遺跡表

番号	種別	遺跡名	所在地	現状	遺跡の状況
1	散布地	七渡瀬Ⅰ遺跡	金城町大字波佐	施設	縄文、弥生、土師器、須恵器 陶磁器、石器
2	住居跡他	七渡瀬Ⅱ遺跡	金城町大字波佐イ441-1	施設	縄文、弥生、土師器、須恵器 陶磁器他 住居跡（古墳時代、奈良時代）
3	古墳他	千年比丘古墳群	金城町大字長田イ490	山林	
3－1	古墳	千年比丘1号墳			古墳時代前期
3－2		千年比丘2号墳			
3－3	経塚	千年比丘経塚			川原石積の経塚
3－4		千年比丘B地区			
4	散布地	長田郷遺跡	金城町大字長田ロ173内	水田	縄文、弥生、土師器、須恵器 陶磁器他
5	散布地	城ノ前遺跡	金城町大字長田ロ101	水田	須恵器、陶磁器
6	その他	田屋庄屋跡	金城町大字長田ロ228	水田	
7	寺院跡	正古庵跡	金城町大字長田イ69	国道	消滅
8	製鉄遺跡	正古庵鉄穴	金城町大字長田イ395	山林	鉄穴水路跡
9	城跡	波佐一本松城跡	金城町大字波佐イ1254	山林	山城　畝状空堀群の縄張 町指定
10	その他	千代帽子遺跡	金城町大字波佐イ555	水田	
11	その他	常磐山の的場	金城町大字波佐イ1195	山林	
12	古墓	剣の墓	金城町大字波佐イ1261	原野	
13	代官所跡	波佐代官所跡	金城町大字波佐イ5	宅地	
14	散布地	アンの木前遺跡	金城町大字波佐イ507	水田	
15	庄屋跡	菅沢庄屋跡	金城町大字波佐イ491	畑	
16	古墓	菅沢古墓	金城町大字波佐イ497	雑種地	
17	製鉄遺跡	堂ケ原炉跡	金城町大字波佐イ42	宅地	
18	窯跡	千年比丘窯跡	金城町大字長田イ490	山林	瓦窯（明治時代）

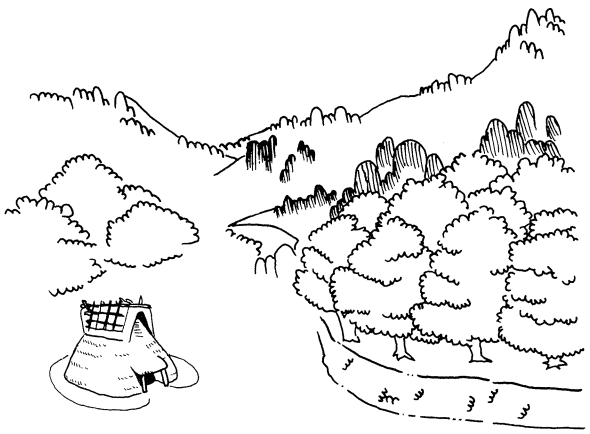
参考文献
島根県那賀郡金城町内　遺跡分布調査報告書Ⅰ—波佐・長田地区—　金城町教育委員会1986年
島根県遺跡分布図Ⅱ（石見編）　島根県教育委員会1992年

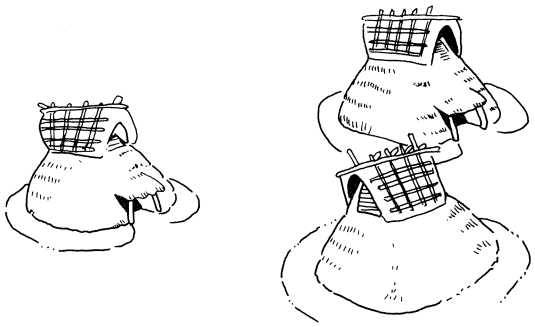
2．七渡瀬の昔の「むら」跡と千年比丘古墳を掘ってわかったこと

《七渡瀬遺跡群》　七渡瀬の「むら」跡は、現在「ときわ会館」・「和紙の館」・歴史民俗資料館などが建っているところで、だいたいこれらの建物の敷地の範囲に縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の「むら」があったと思われます。発掘調査は七渡瀬Ⅰ遺跡が1986（昭和61)年に「和紙の館」建設にともなって行なわれ、Ⅱ遺跡は1991～92（平成4)年に「ときわ会館」を建てる時に実施されています。

「むら」跡が発見されたⅡ遺跡では、古墳時代初期（約1600年前）と奈良時代（約1200年前）の竪穴住居跡が掘り出されました。古墳時代の住居跡は2棟あり、平面形は、だいたい四角形で角に丸味のあるのが特徴です。住居内の中央には囲炉裏のような施設があり、大きな煮炊き用の土器が大石の下からつぶれたような状態で発見されています。洪水に襲われて家が破壊されたのでしょうか。奈良時代の住居跡も角に丸味のある方形をしています。この住居には北側の壁にかまどが造りつけてありました。

また、波佐一本松城と同じ頃の建物跡、溝に打ち込まれた杭なども発見されています。中国産の高級焼き物である青磁の破片が見つかっていますが、これらはここに屋敷を構えた一本松城の城主達のものかとも思われます。これらの他縄文時代後・晩期（約3,000年～2400年前）の土器や弥生時代前期（約2300年前）の土器もかなり出土しましたし、石鏃等の石器類も少し採集されています。このようにして七渡瀬には、縄文時代の後・晩期の頃から本格的な居住が開始され、古墳時代以降もまとまった集落として発展した様子が伺えます。波佐・長田地区の歴史の展開の中心地であったと推定してよいのではないかと思います。七渡瀬より南で発見された長田郷遺跡は





この七渡瀬の集落と親戚関係にあった集落ではないでしょうか。

ところで、七渡瀬Ⅱ遺跡では、土師器と呼ばれる赤焼きの土器が出土していますが、これらの中には「布留式土器」(近畿地方の土師器) の影響を受けたと思われるものが少なくありません。この「布留式土器」が行き渡るようになった頃は、ちょうど千年比丘1号古墳が築造された時期に当り、当時は近畿大和地方 (奈良県) を中心に前方後円墳などの大きな墳墓が造られるようになりました。その影響が波佐・長田地区にも及んできたことが、これらの土器の出土によっても推定されます。また奈良・平安時代の土器 (須恵器) の出土も目立っています。この頃の波佐・長田地区は「長田別府」と呼ばれています。

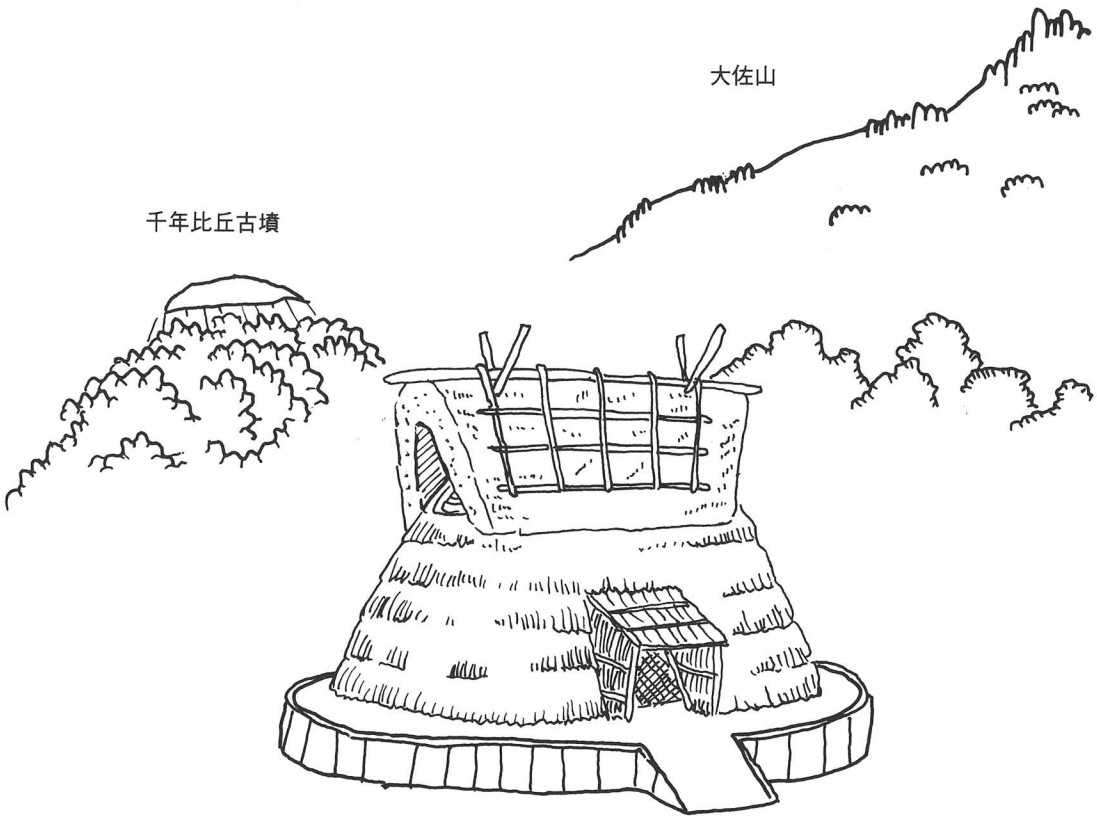
中世の土器では「東播系土器」といわれる土器がいくつか出土していますが、これは兵庫県南部で製造されたもので、それがかなりの量伝えられたことが分かります。当時の波佐・長田地区は「波佐庄」という荘園になっています。このような領地の支配をめぐって中小の中世武士の領主達が争奪を繰り返していたものと考えられます。Ⅱ遺跡の南側は深い谷地形になっており、屋敷地の縁には川原の石を積み重ねた石垣状の遺構が発見されています。年代は近世のものと思われます。

以上のようなことを総合的に考えてみますと、七渡瀬の低い台地は、今も公民館や歴史民俗資料館、あるいは「和紙の館」など公共的な建物が集中していますが、このような状態、つまり波佐・長田地区の中心街となるような場所として古から発展してきたことが考えられます。同時に県境に近いこの場所は山陽・近畿地方からの物資や文化の流入口としても栄えていたように思われます。

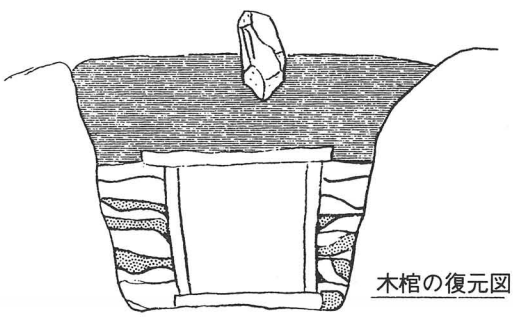
《千年比丘古墳群》　この古墳群は浄連寺の東、大井谷川にかかる岡田屋橋と松本橋との間にあるこんもりとした丘陵の林の中にあります。ここには瘤のように盛り上がった場所が4個所以上あり、これらは1600年～1300年前の古墳時代に造られた豪族の墳墓である可能性がありました。発掘調査は、その是非を確かめるために行われました。調査の結果、丘陵先端の一番北側にある丸い塚が古墳と判明したのです。大きさは直径15メートル、高さ2メートルの円墳です。頂上には3個所の人を埋葬した長方形の穴があり、その中で中央にある大きな穴が発掘されました。遺体はすでに朽ち果てて残っていませんでしたし、副葬品も見当りません。ただ地層の観察によって板を箱形に組合せた棺が使用されたことがわかりました。さらに埋葬が終わってから墓の上でお祭りをしたらしく、その時に使った土器がこわされた状態で発見されています。それに墓の印として長い川石が立てられたことがわかりました。

発見された土器をつなぎ合わせてみますと、楽器の鼓のような形になりました。これは「鼓形器台」といわれて、弥生時代後期から古墳時代の前半にさかんにつくられ、使用された土器で、壷などを乗せる台のやくめをするものです。出雲地方でよく見かけられることから、この波佐・長田地区の最初の支配者が、そちらの豪族との付き合いをもっていたことが考えられます。

他の地瘤は、いずれも自然の土地の盛り上がりで、古墳ではないことが判明しました。ただ川

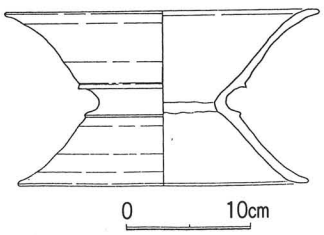


木棺の構造



木棺の復元図

●発掘した土層の断面図より
このようになっていたことが
わかった。



原石を積み上げた所が一個所ありましたが、これは中世ころにお経を納めた経塚と思われます。

このようにして七渡瀬の集落跡、千年比丘の古墳や古墓群が調査されたことにより、波佐・長田地区の長い歴史の歩みがだいぶんはっきりしてきました。ことにこの地の最初の支配者の豪族の墓と同じ時代の「むら」跡が発見されたことは、県内でも珍しく、たいへん意義があるといえます。また波佐・長田地区が山陽・近畿方面と石見の交流の玄関口の役割を果たしていたことがわかったのも大きな収穫でした。

これからも町民の皆さんと手をたずさえ、お互いに知恵と体力を使って郷土の明日のために、過去に学びながら前進していきましょう。御協力を改めて感謝いたします。

（久保谷浩二）

3．　七渡瀬遺跡調査の思い出

「出たぁ」と言う声がする。何々と誰もがそこに集まる。「あぁ大きいなあ」と誰かが言う。早速担当の係が図面を引き、写真を撮る。そして、遺物を取り出し決められた袋に入れるのである。それで一段落する。そしてまた、黙々と丁寧に掘り続けるである。

毎日、暑い暑い炎天下の下で幾十日も作業は続く、掘れば必ず焼き物の破片が出て来るのだ。残念ながら原形のままがない。あおして、住居跡の柱穴跡、或いは「カマド」らしき跡、いろいろと見つかるのである。

ここには大きな集落があったことは明白であると専門家の見解である。なかでも長きにわたる石組の堤防らしき護岸、そして乱立する木杭、これは引き水の為のイセキ（イデ）であったのだろうとのこと。

それに1500年も昔の焼き物類の破片、また、中国製、韓国製、やはり5世紀、6世紀頃の物という。いずれにしても、この地に古くから人が住み着き、相当の権力者がいたのであろう。また、どのくらいの人数がいたのか、どんな祝いかたをしたのか、人も死んだろう。どんな具合に葬式をしたのであろうか、いろいろと想像をたくましくするのである。

また、遺物を掘り当てた時にはなんだか宝物を見つけた様な、また、手柄を立てたような気分である。何千年も土の底で眠っていた物が今日、今、再び太陽の光を受けたと思うと何とも言えぬ気分である。この感動は作業に従事した者でないとわからないのでは。

この度の調査は今までにない大規模な作業であった。そこで全般が一目でわかる航空航空写真をお願いしたが聞き入れてもらわれなかった。誠に残念である。また、一部では竪穴住居の復元の噂も聞いたが、いつの間にか断ち消えた。再度、調査作業も延期された。そのため公民館建設も大幅に遅れた。

今公民館が完成し、当時の面影は微塵もない。建物とアスファルトの底の底で、また眠りについたのである。それも時代の流れまた地域文化の発展であろう。

何れにしても昔も今もこの地がこの地域の中心地であることには間違いないのである。

この調査作業に参加させていただき感謝すると共に公民館より毎日お茶のサービスに対し感謝申し上げる次第です。

（塚本　貞義）

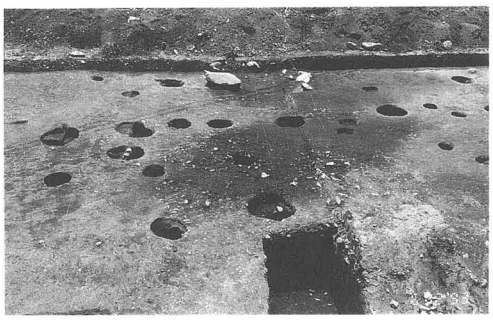
「発掘はたいへんじゃのう！」

「石垣が出たでや」

「長田川の洪水で転がり込んだ石につぶされた土器」

「奈良時代の庶民の夢でもみるか」

「石垣でや、200年～300年昔のもんじゃそうな！」



「なんの穴じゃろうか!?」

4．金城町波佐の歴史

金城町波佐地区の古代史の起源は定かではないものの最近の相次ぐ遺跡の発見で次第に解明されてきました。七渡瀬Ⅱ遺跡（ときわ会館）では、旧石器時代（約1万年前）のチャートという石片が見つかったことから、波佐地区でも人が住んでいたことが判明しました。

縄文時代は狩猟活動が盛んだったことが伺われるが、後期（約4千年前）・晩期（約3千年前）の長田郷遺跡の性格から見ると、この頃から定住化も進んでいたものと考えられます。

長田郷遺跡は大佐山の麓の盆地の低地に立地し、しかも水害に遭遇しにくい場所が選ばれており、周辺の弥生時代の遺跡であるナゴタ遺跡、七渡瀬Ⅰ・Ⅱ遺跡などの関連や遠賀川式土器の出土品を見るとき原始農耕へ移行していく過程が理解されます。また、土垂（どすい）の出土品から考えるとき周布川に沿いそ上したサケ・マスを捕獲しての漁労生活を偲ばせてくれます。石鏃（せきぞく）の出土品から見ると隠岐島の黒曜石を原石としたものと、また、広島県の冠山（吉和村）の安山岩（サヌカイト）を原石としたものがそれぞれ発見されています。

弥生時代の遺跡は、長田郷遺跡、七渡瀬Ⅰ・Ⅱ遺跡などがありますが、特に七渡瀬Ⅱ遺跡は弥生・古墳・奈良時代の住居跡が出土しております。この時代の出土した土器によると近畿地方、北部九州の各地の土器生産地の遺跡との関連が判ります。

このことからも縄文・弥生時代の交易範囲が西日本一帯広い交流がなされていたことが裏付けられます。

古墳時代前期には長田の千年比丘1号墳が造営され、同時代の住居跡が七渡瀬Ⅱ遺跡にも発見され、生活基盤とお墓がセットで発見された例は珍しいことです。

奈良時代に入ると、この地域は久佐郷に所属し、「長田」という地名が現れてきます。平安時代には「長田別府」、鎌倉時代には「長田保」という庄園としての名前がありました。この時代の名残として県境の傍示峠という名称が現存しています。

長田別府の時代において従五位下・河野監物と称する神祇官が大歳神社に派遣されていたが貞観一三年(872)四月三日付けで従五位下大歳神ニ「従五位上」ヲ授（三代貫録）。延喜二十二年(922)那賀郡11座の中にある大歳神社（延喜式神名帳による）は亀遊山波佐一本松城跡東北方向に位置する大歳神社であると思われる。大歳神社の前は大明神原と称し広大な土地があった。

永萬元年(1165)六月の永萬文書「神祇官諸年貢注文」によると「大歳社黒金」に見えるように大歳神社は「たたら鉄」を年貢として産出していたことが伺える。波佐・長田は古来優秀な真砂砂鉄を産出し、たたら製鉄遺跡が密集している土地柄であった。このために利権をめぐる戦火が繰り返されてきた。

大歳神社の正面東側は長田川を挟んで七渡瀬Ⅰ・Ⅱ遺跡があり、七渡瀬遺跡は小字が「細田」という地名で、佐竹屋、竹三屋、ときわ会館、民俗資料館、歴史民俗資料館などの全体で一町歩ばかりの広さがあり、国道の東側には古来、神祇官の館跡もあったという。

また、「波佐」という名称が古文書に現れるのが鎌倉末期で嘉暦元年(1326)一二月の「石見永安別符以下地頭職分文」(吉川家文書)、建武三年(1336)八月二十五日（萩藩閥閲録第3巻周布吉兵衛文書）及び慶長七年(1602)九月二十二日「石州那賀郡波佐村御縄打水帳」(波佐庄屋文書）などに名称を見ることができる。

波佐一本松城は河野氏の居城と古来伝承されていた。平安末からの築城という伝承もあるが、城郭の遺跡の面から見ると主郭(300㎡）を中心とした4つの郭、腰郭、畝状空堀群、堀切、切り通し、水路、石垣などがあり、防御を主とした守りの城郭である。南方尾根続きに水見城跡、北北東方向にある花城跡は細長い2つの郭と4段の郭、堀切、空堀などがあり、別名中谷城、姫ノ城ともいい、元亀元年(1570)に落城した。

波佐常磐山八幡宮は文治元年(1185)八月に佐々木高綱によって長田の大井谷八幡岩より八幡の神を遷宮し佐々木祖霊神を合祀したといわれる。

月山冨田城主尼子經久公によって京都・東福寺の明海和尚をして永正年間より布教させ、長男政久の戦死を弔い天文二年(1533)に法華経3000部などを奉納し、永昌寺（当時は永正寺であった）を開山した。この頃、尼子經久公によって常磐山八幡宮の再建と大舞人8人と小舞人16人の宮座制が導入された。この常磐山には天然性の大杉5株（樹齢約1000年）の県指定天然記念物や、県指定『みんなで守る郷土の自然地域「常磐のカシ林」』には遊歩道が設置され自然散策に適している。

また、亀谷原の笠松山の麓にある速田神社は安芸国の速谷神社が毛利・尼子の戦火に遭遇し社人が亡くなったため亀谷家田中幸與市左衛門宣晴（勧請者）が速谷神社の親戚の縁あって天正十一年(1583)八月平良村に行き、御神体を供養して帰り祠を建立して、速田神社として奉祭した。

江戸時代には津和野藩として、慶長検地、寛永検地などが行われた。元和三年(1617)波佐組七ヵ村（東谷村、西谷村、小国村、徳田村、柚根村、八ッ木村、鼠原村）三〇〇〇石として、恵喜多に波佐組代官所が置かれた。天明八年(1788)長安組代官所に天保九年(1838)に久佐組代官所に、嘉永六年(1853)には再び長安組代官所へと移管して、明治を迎えた。

旧津和野藩街道として、鉄の道としての「笠松峠の石畳路」は、文化八年(1811)九月に鉄山関係者の出銀や下地（げち）農民の出夫によって完成した。全長1800ｍの内1200ｍが1.1ｍ幅の石畳となっており、全国第2位の長さを誇っている。石畳の中腹には、「立石」という記念碑や「大芝」という津和野藩主が領内御巡見の折りに小休止した場所があり、「涼みの松」も現存している。

江戸時代には歌人・三浦繁女(寛楽亭遊絲と号す)、狂歌・澄川益安(溶々庵貞泉と号す)、歌人・澄川双園　明治時代にはチベット探検の先駆者・能海寛などの文化人が傑出した。

近世の生産生活用具を収集した金城民俗資料館には国指定有形民俗文化財758点、県指定221点など、2500点の民俗資料が展示公開されている。金城歴史民俗資料館には埋蔵文化財、たたら関係資料、能海寛資料、島村抱月資料などが多数展示されている。

那賀郡金城町波佐　　隅　田　正　三

5．千年比丘（出家して一定の戒を受けた男子）に関連して

「往古千年比丘という人、当村に来たり天頂畷に槇を植えた。」という。「その大木大いに繁茂し文化の頃枯死せり天頂畷は俗にチンチョッナワテ」という。今の浄蓮寺の前にあり「千年比丘の異名なり」という。千年比丘に遺跡あり、環状列石もある。環状列石は日当ての良い丘の上などで大きな石を立てたりならべたりした遺跡（環状列石）である。

しかし、これはどんな目的に使われたのか今のところまだはっきりわかっていない。環状列石は縄文時代の人の墓という説とお祭りをした跡だという説とがある。遺跡の年代を遡ってみると4世紀中頃とすると約1650年位前の事になる。前方後円墳が、この頃の墓だと思われる。波佐でもこの時代の円墳が見つかっているし、歴史は相当古いと思う。

わが国に佛教が伝わったのが約1400年前である。千年比丘が当地に僧侶として来たのは1000年より早いことが考えられる。

天頂山浄蓮寺と千年比丘の関係

浄蓮寺の縁起に「往古当山の創立年代を知る記録はない。古来より天頂山長福寺と称し、真言宗にして、薬師如来の木像を安置し奉りて、当山の薬師山にして、その本尊今に伝来する。」とあり、今はなにもない。

乃美内蔵輔と称する人が東谷の畑に出生し、青尾京羅に至り、田畑を開きこれに居り、後に横谷の三双船にいき杉林の森林を伐採し田畑を開きたり。弘治二年僧となり、洞円と称し浄蓮寺の開祖となった。

永禄年中(1558)これを再興して真宗の末寺となり、当山開祖の第一世となる。私の空想私案では、千年比丘の山の頂上にある環状列石が経塚ではないかと思う。真言宗では人間は生きたまま佛になる事が出来ると教えた。更に空海はお祈りや呪いによって病気を治ことが出来ると教えた宗教である。

浄土真宗は、これとは正反対で他力本願が一向宗で、一筋に南無阿弥陀佛を唱えれば極楽へ行けるという教えで、一般の人々に広く信じられた宗教である。真言宗から真宗に変わる時に、真言宗のお経本を千年比丘に埋めたのではないかと思う。経塚が石に覆われているのは、容易く掘ることが出来ない様に多くの石が使われているのではないかと思うのである。

那賀郡金城町波佐　　一　町　仁　市

6．波佐多目的集会施設ときわ会館の概要

全体	鉄筋造り．瓦葺．平屋建．面積（1,169㎡）	
多目的集会室	1 室	180.00㎡
ステージ（含控室）	1 室	70.00㎡
会議室	3 室	111.00㎡
調理実習室	1 室	72.00㎡
図書室（含書庫）	1 室	54.00㎡
高齢者創作室	1 室	76.00㎡
事務室等	3 室	27.00㎡
その他		250.82㎡
役場連絡所	2 室	18.00㎡
診療所施設		
診療室	1 室	12.90㎡
薬局・事務室	1 室	18.31㎡
処置室	1 室	15.78㎡
治療室	1 室	16.00㎡
待合室	1 室	12.00㎡
休養室	2 室	21.10㎡
レントゲン室	1 室	24.00㎡
待合ホール	1 室	8.10㎡
脱衣・浴室	2 室	18.00㎡
その他		163.99㎡

経過報告書

本日竣工を迎えました波佐多目的集会施設について、その経過並びに工事内容等のあらましを報告いたします。

現在の波佐公民館は、波佐地区の文化、教育その他いろいろな面における地域のよりどころとして、昭和48年度、文部省の補助金を受け、金城町における公民館第一号として建築され今日に至りました。しかしながら、生涯学習が強く求められる現在、360㎡の面積では効率的かつ効果的な利用に支障も生じ、又、駐車場も狭いことなどもあって、地区民の皆さんから改築の要望が出されておりました。

波佐公民館につきましては、昭和55年12月に地元から集会施設の改築について、町に対して要望書が出されておりましたが、昭和60年12月28日、町及び町議会に対して陳情書が提出されました。町としては、平成2年度に過疎計画を策定し、地域活性化事業として、800㎡程度の公民館を計画いたしました。そして、平成3年12月9日に施設の建築位置、構造等、基本的な考え方を決定いたしました。

用地については、民俗資料館寄りの水田約2,600㎡を必要としたため、地元自治会を始め関係者のご協力を頂きながら、地権者の飯田和男氏に大変ご無理をお願いいたしましたところ、快くご承諾を頂きましたので、平成3年12月25日に買収をいたしました。

この敷地については、以前「和紙の館」を建築する際に遺物が発見されておりますので、その隣接地でもあり、埋蔵文化財の試掘調査が必要であるとのことから、平成4年の春休みを利用して島根大学田中教授、浜田高校大谷教諭の指導のもとで調査を開始いたしました。調査中、古代の遺物や住居跡、さらに遺構も発見されました。この調査は夏休みにも引き続き行い、その結果、田中教授の説明によりますと、一本松城と関わりのあると思われる石垣遺構があり、かなり貴重なものであることがわかりました。その後、秋から島根大学の指導、援助を受けながら、地元の多くの皆さんにもご協力をいただき、本格的な発掘調査を今年の6月末まで行い、遺跡の発掘作業を終結いたしました。

この遺跡は「七渡瀬遺跡」と申しますが、この貴重な文化遺産を後世に伝えるため、田中教授や大谷先生のご指導を受け、当施設の敷地内に遺跡のあらましをモニュメントにして建立しておりますのでご覧頂きたいと思います。

次に設計についてでありますが、その設計条件としては、民俗資料館、和紙の館など、周囲の建物やこの地区に昔から伝わる風俗、風景に調和のとれた外観に配慮する必要があることを重視しております。設計は、コンペによる方法を採用しました。この設計コンペには、いずれも浜田市内の4業者を指名し、この中から最も設計条件等に優れた岡田建築設計事務所の設計を採用することに決定いたしました。

この間、当初から公民館のみの建築を前提に進めておりましたが、平成4年2月、地元地区民

の皆さんを始め関係者の皆さんから、役場連絡所と診療所の併設を望む強い要望がございました。ご承知のように役場連絡所と診療所は、昭和40年に建築されて、かなり老朽化し、屋根等も相当傷んでおり、この際、三つの建物を集合併設することが、地域の拠点としての機能をより強化することになり得策であるとの、評判を固めた次第であります。

このため更に当地が必要となり、これ又、地元自治会の方々そして関係者の絶大なご協力を頂き、隣接いたしますところの地権者である寺崎清春氏並びに松江市にご在住の河野正子氏に大変ご無理をお願いいたしましたところ、快くご承諾を頂きましたので、平成5年3月25日買収させて頂きました。

このようにして、就業併設の多目的集会施設が建築の運びとなり、設計変更等に着手いたしました。

本年3月始めに設計変更を終え、指名業者8社により、3月11日に現場説明、3月22日に入札を行い、2億8千8百40万円で浜田市の㈱中山工務店に落札いたしました。続いて、3月23日に開会中の3月定例町議会において、議案を提出し議決を頂いたところであります。

着工については、冒頭申し上げたように、遺跡の発掘調査に時間を要したため、7月15日から着工いたしました。着工以来、岡田建築設計事務所の行き届いた管理のもとに、経験豊富な中山工務店の熱意によりまして、斬新にして技術の粋を尽くした立派な多目的集会施設「ときわ会館」の竣工をここに見ることができました。

この事業にかかる財源確保については、辺地債の特別枠を充当するよう決定がされ、既に平成4年度分の配当決定がなされているため、予算については平成4年度と平成5年度の継続費としております。

当施設建築にあたり、国、県等関係機関ご当局のご指導はもとより、町議会、地元波佐地区の皆様方の暖かいご協力に感謝を申し上げます。また、ご承知のようにこの地域は急陵な山に囲まれた狭間地域で、平坦部の極めて少ないところであり、農地等も限られた中にある訳でございますだけに、用地関係者の方々には、貴重な財産を快く提供頂いたことに対して改めて衷心より深く感謝申し上げます。

この施設の愛称を「ときわ会館」に決定させて頂きました。これは、愛称募集を行いました結果、91点の応募の中から「ときわ会館」という名称をつけられた方が7名おられ、抽選により大字波佐の相木多美代さんが選ばれた訳でございます。

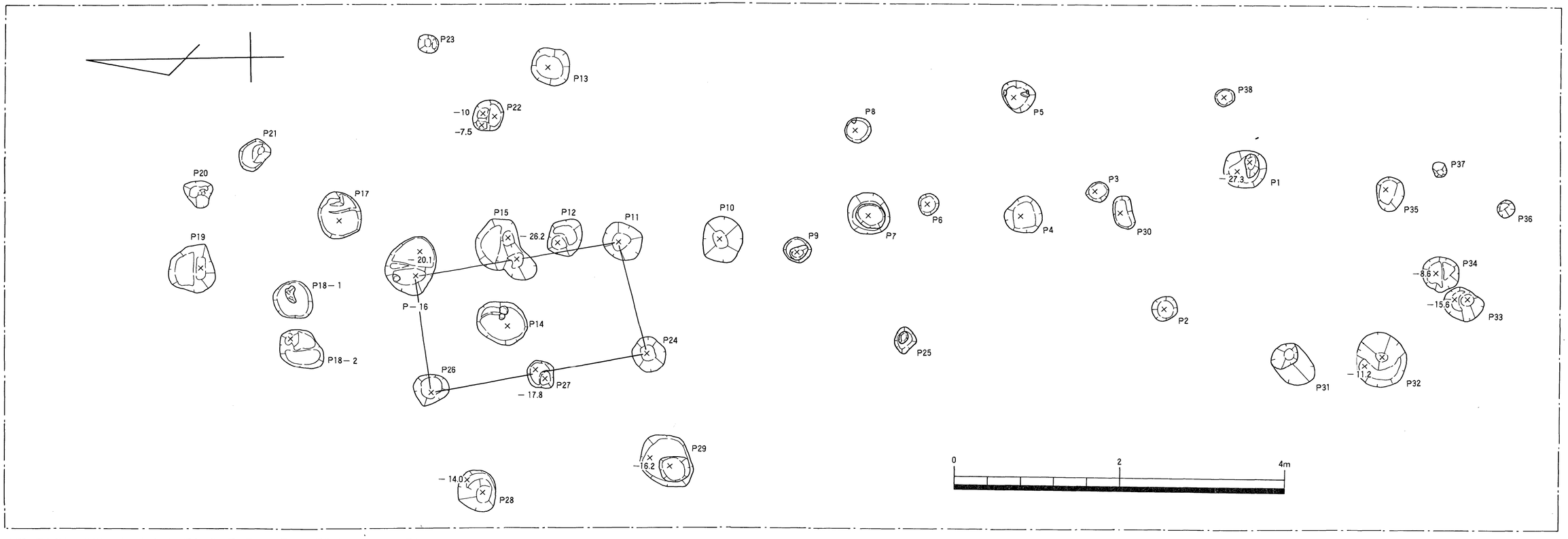
尚、建物の概要及び事業費、財源内訳等は別表のとおりであります。

この施設が、これからの波佐地区のよりどころ、拠点として多くの皆さんにご利用ご活用されることを願って経過報告といたします。

『波　佐』
— 島根県那賀郡金城町波佐地区における考古学的調査 —

平成6年3月

発　行　　金城町教育委員会
編　集　　金城町教育委員会
　　島根大学法文学部考古学研究室
印　刷　　㈲高浜印刷所



×印：深さ測定点（単位：cm）　各ピットの深さは第９図に示した。図中×は重複ピットについての深さ測定点。数値はその深さを示す。

第31図　F−3、F−4区ピット群平面図

報告書抄録

ふりがな	はざ
書名	波佐
副書名	那賀郡金城町波佐地区における考古学的調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	田中義昭、大谷晃二、久保谷浩二ほか
編集機関	金城町教育委員会
所在地	697-01　島根県那賀郡金城町大字七条1982　TEL(0855)42-1238
発行年月日	1994年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
七渡瀬Ⅱ遺跡	島根県那賀郡 金城町大字 波佐1441-1 1442-1	32462		34° 46′ 29″	132° 12′ 02″	試掘調査 19920309～ 19920401 1次調査 19920720～ 19920810 2次調査 19930323～ 19930625	2,800	多目的集会施設建設に伴う発掘調査
千年比丘古墳群	那賀郡金城町 大字長田 1490番地外	32462		34° 46′ 05″	132° 12′ 07″	第1次調査 19910806～ 19910812 第2次調査 19920721～ 19920816 第3次調査 19930807～ 19930825	200	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
七渡瀬Ⅱ遺跡	集落跡	古墳時代初頭 奈良時代 近世	竪穴住居-2軒 竪穴住居-1軒 石墓状遺構	縄文土器 弥生土器 土師器、須恵器 陶磁器	縄文～近世の複合遺跡
千年比丘古墳群	古墳 火葬墓	古墳時代初頭 近世～近代	円墳1基(主体部土壙3基) 15m×2m 焼土壙	鼓形器台、壷 砥石	箱型木棺 中央主体のみ調査